

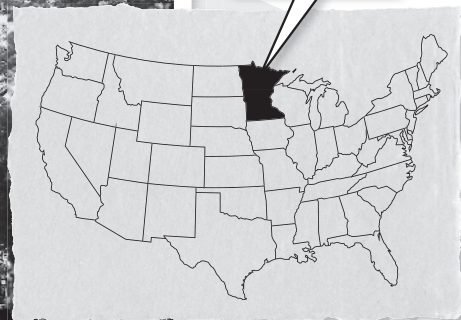
文&写真

学生記者

宮田詩織 (法学部2年)



ミネソタ



ミネソタの街並み(いずれも筆者撮影)

今年の夏休みは短かったと言っても日数が少なかったのではなく、私の体感として、である。

中央大学の短期留学プログラム「カールトン大学での3週間の語学研修+NY旅行」に参加した。

授業の一環で、事前授業や現地での研修を修了すれば4単位のほか、カールトン大学から修了証明書が付与される。

参加するには、選考を受けて合格する必要がある。肝心の英語力に不安があったから、春休み中の中大・英語講座を受講して選考に備えた。

海外プログラムに応募しようと思ったのは1年生の春休みだった。大学2年・成人を目前にして、長期休暇を有効利用して、海外生活を経験してみたかった。

そして選考を経て、アメリカ留学が決定した。プログラムの内容は、ミネソタ州ノースフィールド市にある中大の海外協定校、カールトン大学で20日間過ごした後、ニューヨークを4日間、旅行するというものだ。大学滞在中は学生寮で生活する。

留学は決まったものの、準備をしていくうちに不安が募ってきた。行きたくない…とは言えず、憂鬱な日々を過ごした。

さらにはアメリカへ旅立つ日、航空機が出発前に4時間ほど遅れた。結婚する前に不安が大きくなり、結婚したくなくなる現象をマリッジブルーと呼ぶが、私は留学ブルーのような状態になっていた。出発便の遅れは、その気持ちに拍車がかかったように感じた。

## 変身フードファイター

アメリカに到着してから最初の1週間は、正直、日本に帰りたいという気持ちでいっぱいだった。

食べ物が違った。大学の食堂で、ほぼ毎日食べていたが、著しい環境の変化により、食事が喉を通らない。

授業ではもともと英語力があまりなかったため、先生が何を言っているのか、なかなか理解できず、理解できたとしても英語で返すことができない。

翌週、プログラムの一環として現地のフェアのようなものに行った。フェアというと、食べ物や雑貨などを屋外で販売するものというイメージ。現地にはそれに加えて遊園地にあるようなアトラクションがたくさんあった。

アトラクションは安全なのだろうが、私が乗ったものは、体を保護する安全バーが緩くて、乗っている間に落ちそうになり、生命の危機すら感じた。日本では絶対に体験できない、ある意味、良い経験になった。

さて、最初の1週間は楽しめなかったと書いたが、このフェアに行ったあたりから段々と周りの人とコミュニケーションが取れるようになり、生活にも慣れて、楽しくなっていった。

食事でもたくさん食べられるようになり、友達からフードファイターと呼ばれるまで食欲は回復した。英語は相変わらず分からないことも多かったが、周りの人に助けをもらいながらなんとか頑張った。

第2週で印象に残ったのは、これもプログラムの一つ、メジャーリーグ観戦だ。当地ミネアポリスには、リーグ中地区、ミネソタ・ツインズの本拠地球場がある。

最初の機会は、雨で試合順延となり、ホットドッグを食べに球場に行ったようなもの。再度のチャンスに恵まれ、ようやく観戦できた。

球場には、日本と違って組織立って応援するリーダーがいない。登場する選手個々の応援歌みたいなものもない。

スタンドは地元ツインズがヒットを打てば盛り上がり、アウトを3つ取れば拍手が起こる。試合開始の頃は少し寂しい感じがしたのだが、各々が自由に応援するというのがアメリカらしいと実感した。

第1週は一日一日がかなり長かった。第2週はあっという間に過ぎた。楽しい時間はあっという間に過ぎるというが、アメリカでの生活が楽しくなるにつれて、時の流れは急に速くなったように感じた。

ミネソタでの研修生活を終えた後は、ニューヨーク旅行へと旅立った。買い物をしたり、観光地を回ったりと自由に過ごした。

ニューヨークは人が多く、高層ビルが建ち並んでいた。ミネソタの牧歌的な雰囲気と比べながら、どちらも体感できた。

## 迷ったらGO!

24日間のアメリカ留学を終えた今、自分でもびっくりしている。

留学に行きたくない、早く日本へ帰りたと思って



ニューヨークの街並み

いた最初の頃には考えられなかった気持ちが芽生えたのだ。もう一度、留学に行きたい、と思うようになった。

慣れない環境下、ほぼ1カ月生活したことは良い経験になった。英語がすごく得意という訳ではなかった。行く前は不安でいっぱいだった。だが、留学したことで様々な経験を積み、見聞を大いに広められた。行って良かったとはっきり言える。

もし留学に行くか迷っている人がいれば、ぜひ行ってほしいと思う。



### 短期留学プログラム

中央大学は学部学生交流として、米国のカールトン大学と交流協定を1983年に締結。翌84年夏から同大で短期留学プログラムを始め、活発な交流を続けている。

ニューヨーク・タイムズが発行し、米国で最も信頼される大学案内によると、同大は学術レベルで最高を意味する全米・五つ星大学36校のうちの一校。

# 学生記者になりませんか?

『HAKUMON Chuo』は中大生が取材・編集する大学広報誌です。現在、学部在学学生を対象に学生記者を募集しています。

### 【バックナンバー】



No.252  
2017夏



No.251  
2017春



No.250  
2017早春



No.249  
2016冬



No.248  
2016秋

- 元新聞記者のプロや先輩の学生記者に、取材方法・原稿の書き方をはじめ添削指導を受けることができます。将来どんなキャリアを目指すにも文章力が重要です!
- 取材を通して、さまざまな人に出会うことができます。出会いの数ほど思い出ができることでしょう。
- 記者活動を通してコミュニケーション能力など「社会人基礎力」を身につけることができます。

【お申し込み・お問い合わせ】

中央大学広報室『HAKUMON Chuo』 編集担当：久保田茂信 Phone：042-674-2048(直通) E-mail：hc@tamajs.chuo-u.ac.jp